広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践（その２）

榎　田　一　路
前　田　啓　朗
磯　田　貴　道
田　頭　憲　二
広島大学外国語教育研究センター

１．はじめに

本報告は，広島大学において平成16年度に企画が開始され，平成17年度から実施が行われたキャンパス・ユビキタス・プロジェクト（以下，CUP）に関連して実践した教養教育における英語授業を，前年度に引き続き報告するものである。

CUPは，情報政策室の主導のもと，学生がいつでも・どこでも，自由にネットワークを利用できるようにするという理念のもとで，新入生に対するコンピュータ購入の推奨や，無線LANをはじめとする学内のネットワーク環境の整備，下宿への高速回線網の整備等を企画している。

そこで，前年度の取組を踏まえ，学生がパソコンを所有し，ネットワーク環境もより良いものになりつつあるという状況に対応して，英語教育ではどのような実践を行うことができ，学生の英語力を伸長することができるのかを継続的に検討することとした。

２．実践の経緯と概要

平成18年度は，前年度に引き続き，経済学部昼間コースの１年次生を対象とした教養教育の英語科目において，CUPの実現を前提とした授業実践を行った。対象となる学生は，広島大学の新入生において平均的な英語力を持つと考えることができると判断されたことが基準となり，長期的には全学に広げることを見据えた教育実践に適すると判断できたためである。平成18年度入学生の５月時点のTOEICスコアは，全学の学生のうちの受験者（n=2,485）では平均458.6・標準偏差111.9であり，対象の学生のうちの受験者（n=147）は平均455.8・標準偏差86.7であった。

また，１年次生は前期に２クラス（コミュニケーションＩＡ・ＩＢ），後期に２クラス（同ⅡＡ・ⅡＢ）を履修するが，そのうちコンピュータを用いた学習に向きやすいＩＢ（読むこと中心）とⅡＢ（聞くこと中心）の授業を対象とすることとした。

指導には，CALL（Computer Assisted Language Learning）教室を用いて授業を行った。CUPではあくまで，推奨機種を中心としてパソコンの所有を奨励するものであり，指定機種の購入を強制するものではないため，授業の中でコンピュータを利用するには外国語教育用に映像・音声の伝送などに特化して機能を増強したCALL教室が不可欠であった。

教材には映像・音声や各種解説を備えたCD-ROMが付属した市販教科書を利用することで，学生の所有するノートパソコンを活用した指導を行った。この際，３名の担当教員が年間を通じて，特定の学生を担当することにより，教員間での教科書や授業内容の統一を図った。

また，独自にWEB（Web Based Training）教材の作成を行って，学生にネットワーク上で様々な課題を提供することとともに，市販のTOEIC対策コンテンツを活用して，ネットワーク環境

を活用した課外における学生の自主的学習の支援を行った。

このようにすることで，本学のCUPが目指すネットワーク環境のもと，そのネットワークを有効に活用した英語授業の方向性を示すことを試みた。以下で，本実践で行われた取り組みの詳細を報告する。

3．具体的な実践内容（2006年４月～12月）

本章では，今年度のCUPにおける具体的な取り組みを見ていく。以下，(1) 昨年度の実践内容を踏襲したもの，(2) 昨年度の実績を踏まえて，今年度新たに付加したものに分け，それぞれについて報告する。なお，毎回の授業内容およびシラバスは前年度のものとほぼ同じなので，今回は割愛する。これらの詳細については榎田ら（2006）を参照のこと。

(1) 昨年度の実践内容を踏襲したもの

昨年度の取り組みのうち，以下の内容については一定の成果が見られたので，本年度も継続して実行した。

・独自のクラス編成，および教授内容の共通化

本取り組みの対象科目は，１年次前期開講の「コミュニケーションＩＢ」と，同後期開講の「コミュニケーションⅡＢ」である。これらの科目につき，経済学部生約150名については，他の学部と混在させず，単体で３レベルから成る習熟度別クラス編成を行った。また同時に，各レベルとも年間を通じて同一教員が担当することとした。さらに，共通の教科書を使用し，年間シラバスを共通化した。これにより，後期にクラスが変更した学生にも同一内容の授業を行えるようになった上，夏季休暇期間を含めた年間の学習計画が可能となった。

なお，本年度の教科書は昨年度と同一のもの（成美堂のリーディング用教材『Inside Stories U.S.A. with Multimedia: CD-ROMで学ぶアメリカ文化』）を使用した。これは，教科書変更に伴う新たな準拠教材やワークシートなどの作成に労力を費やすよりも，昨年度の実績を踏まえ，現有の教材資産を選択的に活用しながら新たな取り組みを付加する方が，結果として取り組みの充実につながると判断したことによる。

・教員間の定期的な情報交換

昨年度１年間の実践を通じて，担当教員はチームワークのもと，取り組みに必要なノウハウを高いレベルで共有できるようになった。今年度も必要に応じてミーティングを行い，共通認識の確認と意見交換を行った。

・単語テストおよび小テストの実施

学生に常に学習を促すため，毎回の授業開始時に単語テストを行うと同時に，授業内容についての小テストを毎月実施した。これにより，前期末および後期末に実施されるテストが全体の成績評価に占める比重は軽くなり，日頃の予習・復習に対する評価を重視できるようになった。

・オリジナルWBT教材の使用

昨年度の実績を通じて開発したWBT教材は以下の通りである。

－単語テスト用教材
－ TOEIC 形式のリスニング演習用教材
－同ディクテーション用教材
－教科書の復習用教材（語句並べ替え，和文英訳）
－夏季・冬季休暇中の宿題（前期・後期の単語復習）

本年度もこれらの教材を，各教員の裁量で必要に応じて使用した。

(2) 今年度新たに付加した取り組み

・TOEIC®全学一斉実施時の英語学習状況アンケート調査

TOEIC 運営委員会との共同研究の一環として，５月の TOEIC®全学一斉実施時に，全学１年生を対象に，英語学習に関する意識調査を行った。この中で得られた経済学部生のデータは，ニーズ分析の意味で CUP にとっても重要であると思われるので，後ほどその結果を分析する。

・「共通の宿題」としてのオンライン TOEIC 準備講座の導入

大学英語教育における問題点として，学習の絶対量の不足がしばしば指摘されている。本取り組みが目標に掲げている TOEIC のスコアアップを，週90分，通年30回の授業時間のみで実現することは困難だろう。これまでも授業時間外の課題用としてとして和文英訳やディクテーションなどの WBT 教材を開発してきたが，学習の絶対量をさらに確保するため，３クラスに「共通の宿題」を導入することとした。

本学外国語教育研究センターでは，オンライン TOEIC 準備講座として ALC NetAcademy の「初・中級コース」「スタンダードコース」を導入し，学生・教職員の利用に供している。2006年にはサーバが更新され，より信頼性の高い運用が可能となった。今回の「共通の宿題」に，これらのコンテンツの一部を利用することとした。学生の課題消化状況をチェックするとともに，月１回の小テストの範囲に含めることとした。

実施は，ALC NetAcademy の学内サーバ更新時期に合わせ，５月末からとした。これは５月の TOEIC®全学一斉実施の直後にあたるため，以後の TOEIC テストの結果に「共通の宿題」の効果を上乗せしたいという意図もある。

・TOEIC®IP テストを７月にも実施

本学では１年次の５月と２月に TOEIC®を一斉実施しているが，経済学部の１年生を対象に７月末にも TOEIC®IP テストを実施した。教員はこのテスト結果をもとに，それまでの教授内容の検証や以後の軌道修正を行い，学生は自身の英語力を点検するために使用した。データの詳細については別の機会に分析を行う。

・単語実力テストの実施

一年間の授業で学習する単語から計50問の実力テストを作成し，４月の前期の第１回目の授業と，７月の前期の最終時に，同一の内容で実施した。７月のテスト結果についてはその場で自己採点させ，４月の結果と比較させた。年間を通じて語彙学習に重点を置いており，その結果を実力テストの形で検証することが目的である。この結果については後ほど分析する。

・センター教員研修での意見交換

9月に実施された本学外国語教育研究センターの教員研修の中で，本取り組みの中間報告を行った。センターの教員から意見や示唆を得ることで，以後の取り組みの参考とした。

・TAの利用

教育活動を円滑かつ効率的に行うため，外国語教育研究センターの援助により，大学院生のティーチング・アシスタント（TA）を2名利用し，小テストの採点や転記などの業務を依頼した。

4．データの分析と結果

ここでは，本取り組みに関するデータを3つ報告する。まず，対象の学生がどのような目的で英語を学んでいるか調査した結果を報告し，学習動機の特徴を記述する。次に，前期の授業の初回と最終回に行った語彙テストの比較により，授業の効果を検討する。最後に，夏季休業期間中の課題による学習の成果を検討するために，課題に含まれる確認テストの結果を報告する。

4.1　英語学習の動機

まず，学生の特徴を知るために，彼らは英語学習に対してどのような動機を持っているのか調査した結果を報告したい。この学習動機の調査は，本学の学生が授業外でどのような英語学習を行っているか全学的に調査したもの（英語学習状況アンケート調査）の一部として行われた。ここでは経済学部生について集計し，彼らの学習動機の特徴を考察する。

調査は，大学入学後約1ヶ月経った5月に行われた。本学の1年生全員が受験を義務づけられているTOEIC®IP全学一斉実施の際に質問紙を各席に配布し，空き時間に記入するよう指示された。欠席者は2週間ほど後に行われる追試験を受験することが求められ，この際にも質問紙の配布と記入を行った。いずれもTOEIC®IPの終了後に回収を行い，合計で148名分が回収された。

調査には表1にあるような項目を用いた。それぞれの項目について，自分に当てはまる度合を5段階（1：全くあてはまらない，2：あまりあてはまらない，3：どちらでもない，4：ややあてはまる，5：よくあてはまる）で答える。3を中性点とし，値が高いほど当てはまる度合が高いことを示す。

表1は，各項目における1～5のカテゴリー別の度数を示している。また図1から図6は，表1のデータを図示したものである。縦軸は人数を表し，各カテゴリーの棒グラフの上にはパーセントを示している（小数点第1位で四捨五入）。これらを基に，学生の学習動機について考察を行いたい。

項目1「私は，授業があるから仕方なく英語を勉強しています」は，英語学習に対してあまり必然性を見出せない状態を測定することを目的としている。この項目に当てはまると答えた者（4または5に回答した者）は，全体の約32%を占めており，英語学習に対して積極的でない者が少なからずいることを示している。「仕方なく」ということばが表すように，自ら英語を身につけようとする自律的な状態にあるのではなく，やらなければならないからやるといった他律的な状態にあると考えられる。

表1　度数分布（上段が人数，下段がパーセント）

	質問項目	1	2	3	4	5	欠損
1	私は，授業があるから仕方なく英語を勉強しています	17	35	48	37	11	0
		11.49	23.65	32.43	25.00	7.43	0.00
2	英語ができることは自分にとって必要なことなので英語を勉強しています	3	25	44	59	17	0
		2.03	16.89	29.73	39.86	11.49	0.00
3	英語が好き，または英語に興味があるので英語を勉強しています	14	34	48	44	7	1
		9.46	22.97	32.43	29.73	4.73	0.68
4	英語ができることに憧れる，または英語ができるとかっこいいから英語を勉強しています	14	22	45	52	14	1
		9.46	14.86	30.41	35.14	9.46	0.68
5	英語は私の大学での専門，または将来の進路にとって必要なので，英語を勉強しています	12	31	50	42	12	1
		8.11	20.95	33.78	28.38	8.11	0.68
6	TOEIC の試験でがんばって，できるだけ高い点数を取ろうと思います	3	14	33	59	39	0
		2.03	9.46	22.30	39.86	26.35	0.00

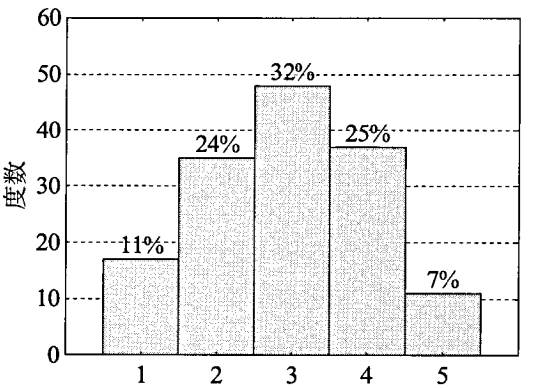

図1　度数分布（項目1）

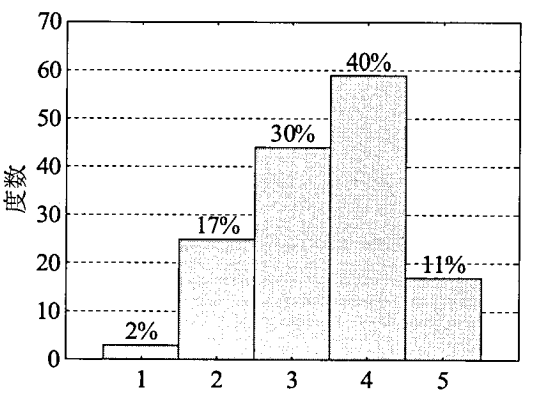

図2　度数分布（項目2）

項目２「英語ができることは自分にとって必要なことなので英語を勉強しています」は，英語学習に対して，学業や生活などへの必要性から生まれる動機を測定することを目的としている。この項目で４ないし５に答えた者は全体の約５割であった。およそ半数の者が，何らかの必要性から英語学習を行っていることを示している。

この項目ではどのような領域で英語が必要とされるか特定はしていない。そのため，大学での英語教育に関連の深い，学業や将来の進路への必要性に領域を特定した質問を，項目５で行っている。

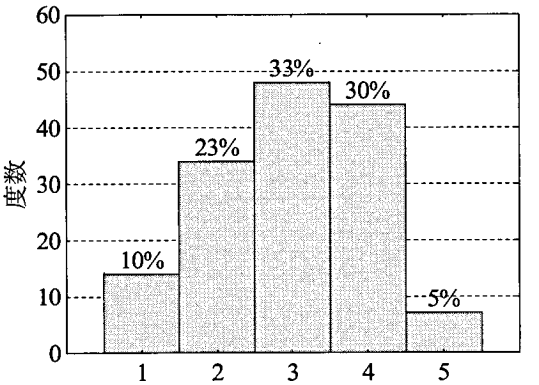

図３　度数分布（項目３）

項目３「英語が好き，または英語に興味があるので英語を勉強しています」は，「好き」，「興味」といったことばが示すように，英語学習に対する内発的な動機を測定することを意図している。項目２との違いは，項目２が外発的な動機であるのに対し，項目３は内発的なもので，英語学習そのものに価値を見出している状態である。この項目では，約35％の者が４または５に回答している。

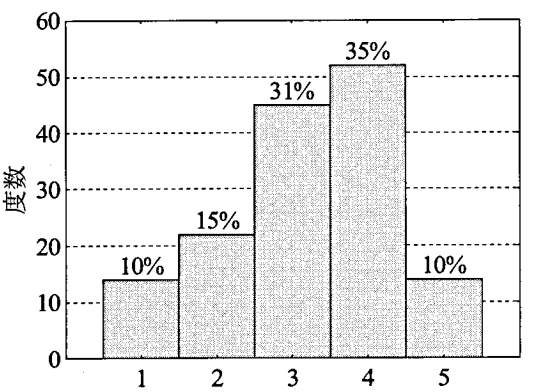

図４　度数分布（項目４）

項目４「英語ができることに憧れる，または英語ができるとかっこいいから英語を勉強しています」は，「憧れ」，「かっこいい」ということばが示すように，英語ができることを自分の理想

像としている度合を指し，自己イメージから生まれる動機を意味している。約45%が4ないし5に回答し当てはまると答えている。

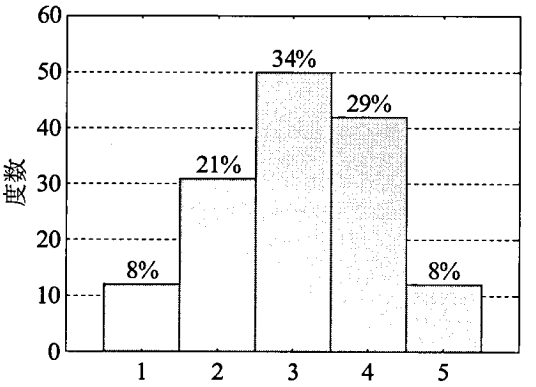

図5　度数分布（項目5）

項目5「英語は私の大学での専門，または将来の進路にとって必要なので，英語を勉強しています」は，項目3と同じく必要性から生まれる動機を測定するが，必要性を感じる領域を，大学での専門または将来の進路というように限定をしている。この項目を設けた理由は，大学の英語教育の目的のひとつは，学生の学業や進路に役立つことであり、そのニーズを念頭にカリキュラムが決定されることが多いからである。したがって、実際にどの程度の学生がこのような動機を持っているか知ることは、指導の上で重要である。図5が示すように，この項目に当てはまると答えた者（4または5に回答した者）は，約37%であった。

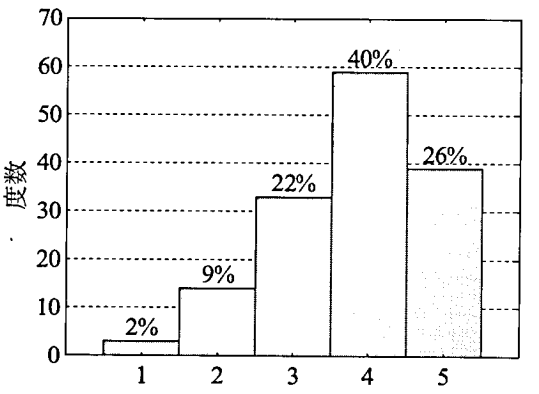

図6　度数分布（項目6）

項目6「TOEICの試験でがんばって，できるだけ高い点数を取ろうと思います」は，TOEICの点数を伸ばそうとする積極的な意欲がどの程度あるか測定することを目的に設けられた。この項目に当てはまると答えたものは約3分の2であった。

以上6項目の結果の中で特に注目したいのは，学業や将来の進路への必要性から生まれる動機について測定した項目5である。大学では学生に対して，学業や就職などで英語の必要性を教示

することがある。しかし，項目５で当てはまると答えた者は，全体の約３分の１で，多くはこの必要性が英語学習の動機に結びついていないことを物語っている。

4.2　語彙テストの分析

前期の授業の初回と最終回において，指導の成果を測定する目的で，語彙の実力テストを実施した。このテストは，実用英語技能検定（英検）の過去の問題の中から，前期と後期の授業で必須とした単語を含む問題を50問集めたもので，準２級の問題から８問，２級の問題から17問，準１級の問題から17問，１級の問題から８問選ばれた。この試験を前期の第１回目の授業に行い，指導前のデータを得た。そして前期の最終時に第２回目の試験を行い，これを指導後のデータとした。試験時間は30分で，正解１問につき２点で集計を行った。なお，試験は前期に行われたが，問題には後期の授業で学習する未習の単語も含まれている。

２回の試験は同じ問題を使用しているが，２回目の試験は１回目から約３ヵ月後に行われており，また，問題用紙と解答用紙はすべて回収し，正解も与えていないことから，練習効果による得点の上昇はきわめて可能性が低いと考えられた。

表２　語彙テストの結果

	平均	標準偏差	*t*	*df*	*p*
第１回	55.02	8.83	-14.51	144	.00
第２回	66.83	10.12			

履修者のうち欠席者を除き，２回の試験を受験した145名を分析の対象とした。２回分の試験の平均点と標準偏差は表２のとおりであった。１回目から２回目へかけて，平均で約11.8点の上昇が見られた。

この平均値の差は統計的に有意といえるかどうか検討するために，対応のある*t*検定を行った。有意水準を５％に設定して検定を行った結果，表２のとおり差は有意であった。これらの結果から，指導を行った結果，授業で必須とした語彙について，全体的に向上が見られたと言えるだろう。

4.3　夏期休業期間中の課題の実施状況

前期の復習として行われた夏休みの課題は３チャプターから成り，各チャプターの最後には，そこで学習したことが定着したかどうか確認するテストがある。各20問で，80％以上の正解（16問以上）を合格とした。ここではその結果を検討する。

表３はチャプターごとの平均値と標準偏差である。また表４は，16点から20点までの点数ごとの人数とパーセントを示す。なお，同じ範囲を複数回行った者が若干名いるので，人数は延べ数である。

表３　確認テストの記述統計

	chapter 1	chapter 2	chapter 3
平　　均	19.28	19.44	19.45
標準偏差	0.95	0.87	0.82

表4　点数ごとの分布

	chapter 1		chapter 2		chapter 3	
	度数	%	度数	%	度数	%
16点	0	0.00	0	0.00	0	0.00
17点	12	8.70	7	5.11	5	3.70
18点	12	8.70	14	10.22	13	9.63
19点	39	28.26	28	20.44	33	24.44
20点	75	54.35	88	64.23	84	62.22
計	138	100	137	100	135	100

表3より，各回の平均値を見ると，どのチャプターにおいても満点（20点）に近く，標準偏差も小さいことから，多くの者が高い正解率を見せていることが分かる。これは表4に示される度数分布により支持される。どの回においても16点は0人で，それよりも高い得点で合格しており，また，80%以上の者が19点または20点の範囲にいることが分かる。これらの結果から，この課題における学習は高い成果を挙げたと言えるだろう。

5．課題と今後の見通し

課題と今後の見通しとしては，以下の4点が挙げられる。

・教授内容のリニューアル

この2年間の取り組みで獲得したノウハウをもとに，次年度以降は教科書と扱う題材を，よりTOEIC-orientedなものにする予定である。これまで取り扱ってきた題材は，アメリカの文化事情に関するものであり，日常生活やビジネスなど，いわゆるTOEICが題材としているトピックとは若干の相違が見られる。そこで，よりTOEICに特化した授業内容とすることで，学生のスコアに変化が生じるかどうかを見る予定である。

しかしながら，TOEICスコアとはあくまで授業の結果の一部に過ぎないため，授業の成果全体をその優劣のみで判断することは，大学英語教育に携わる者としては厳に慎むべきであろう。また，TOEIC対策の問題演習に終始する英語授業というのも本末転倒である。そこで，TOEICに直接的に関連した題材とそれ以外のもののバランスを常に考えると同時に，問題演習以外の活動の充実を目指して授業計画を立てていく予定である。

・授業の同時開講の実現

同一の仕様によるCALL教室数の制限から，これまで3クラスのうち2クラスを同時開講していたが，次年度からは3クラスを同時開講する。これは本学のCALL教室のうち，老朽化して稼働率が低下していた1教室が更新されたのに伴い，次年度よりWindows XPのパソコンによるほぼ同仕様のCALL教室を3教室同時に稼働できるようになったことによる。今後はテストの共通化など，よりレベルの高い実践を目指していく。

・今後の「共通の宿題」

今後の「共通の宿題」については，ALC NetAcademyの有償アップデート版の導入や独自教

材への移行なども視野に入れつつ，教材システムを再検討する必要がある。今回利用したALC NetAcademyは，システムの仕様による使い勝手の悪さが目立った。学生の自学自習用に設計・開発されているため，授業の補助教材として利用する上で必要な成績管理が詳細にできない上，教員が独自に小テストを作成することも困難である。さらに，同システムはブラウザ上で独自のプログラムを起動するため，動作がOSとブラウザに依存する。このため本報告の執筆時点では，最新のWindows VistaおよびInternet Explorer 7では動作せず，有償アップデート版であるALC NetAcademy 2を除き，これらの動作環境に対する今後のサポートの予定も不明である。次年度以降，新入生の多くがWindows VistaをOSとするノートパソコンを購入するものと思われるので，現在の教材を今後も使い続けることは問題が大きいだろう。

・学生の動機づけ

本プロジェクトから実りある成果を得るためには，教授者側の不断の努力は当然だが，まず何よりも学生の学習意欲が必要だろう。しかしニーズ分析の結果を見る限り，経済学部生の英語学習に対する動機づけがまだ不十分であるといえる。学生の意欲を引き出すための働きかけには，例えば先輩や卒業生による講話など，学部の協力が必要なものも考えられるが，まずは日々の授業で可能なことから始めてみるべきである。例えば，以下のようなことが考えられる。

－就職や昇進に必要な英語力，その中でのTOEICの役割，各種英語学習法などに関する情報提供を積極的に行う。

－学習の成果を実感させるための仕掛けを授業内に盛り込むことにより，語学学習への意欲を喚起する。

－TOEICスコアは授業における英語学習の成果の一部であると考え，これを授業の成績評価に反映させる。

付記　本稿は平成18年度財団法人広島大学後援会研究助成金による研究成果の一部である。

参考文献

榎田一路，前田啓朗，磯田貴道，田頭憲二「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践（その１）」(2006)『広島外国語教育研究』９，広島大学外国語教育研究センター，115-125.

ABSTRACT

Classroom Practice in English Classes Based on the Hiroshima University Campus Ubiquitous Project: Report II

Kazumichi ENOKIDA
Hiroaki MAEDA
Takamichi ISODA
Kenji TAGASHIRA
Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

This article provides an outline of the follow-up classroom practice in English classes based on the Hiroshima University Campus Ubiquitous Project and presents the details of the teaching syllabus/procedures and teaching materials for WBT (Web Based Training).

In this project, schedules are set up so that the same three teachers will take charge of the same English classes (Communication IB and Communication IIB) during the course of the whole year. The students are first-year students in the Department of Economics, and each class is conducted by means of the CALL (Computer Assisted Language Learning) classroom, as well as an online network system. Based on achievements and problems of the last year's project (see, Enokida, Maeda, Isoda, & Tagashira, 2006), some attempts are instigated for further curriculum/lesson developments: on-line homework (ALC Netacademy), English vocabulary proficiency tests, and questionnaire survey for English language learning motivation. The results of a questionnaire and the class assignments during these courses reveal some characteristic tendencies of the students.